と（格助）、わななくわななく（副詞）書き（四段・用）て（接助）とらせ（下二・用）て（接助）、いかに（形容動詞・ナリ・用）（副詞）

思ふ（四段・終）らむ（現在推量「らむ」体）と（格助）わびし（形容詞・シク・終）。これ（格助）が（格助）こと（格助）を（終助・願望）聞か（四段・未）ばや

と（格助）思ふ（四段・体）に（接助）、そしら（四段・未）れ（受身「る」用）たら（存続「たり」未）ば（接助）聞か（四段・未）じ（打消意思「じ」終）と（格助）

おぼゆる（下二・体）を（接助）、「俊賢の宰相など（副助）、『なほ内侍に（副詞）（格助）

奏し（サ変・用）て（接助）なさ（四段・未）む（意思「む」終）。』と（格助）なむ（係助）、定め（下二・用）給ひ（四段・用）

ⓚ俊賢の宰相→帝　ⓢ左兵衛督→俊賢の宰相

し（過去「き」体）。」と（格助）ばかり（副助）ぞ（係助）、左兵衛督（さひょうゑのかみ）の（格助）中将に（断定「なり」用）

おはせ（サ変・用）し（過去「き」体）、語り（四段・用）給ひ（四段・用）し（過去「き」体）。

ⓢ作者→左兵衛督　ⓢ作者→左兵衛督

と、震えながら書いて渡して、（その場にいる人々は）どのように思うだろうかと思うとつらい。このこと（歌の評）を聞きたい

と思うけれども、悪く言われていたら聞くまいと思っていたけれども、「俊賢の宰相などは、『やはり内侍に（していただくように）と帝に申し上げて任命しよう。』と、お決めになりました。』

とだけ、左兵衛督で（当時）中将でいらっしゃった方が、お話しくださいました。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/